

麻畑の一夜

岡本綺堂

青空文庫

A君は語る。

友人の高谷君は南洋視察から新しく帰つて来た。日本でこのごろ流行する麻つなぎの内職に用いる麻は内地産でない。九分通りはマニラ麻である。フィリピン群島に産する麻のたぐいはすべてマニラ麻の名をもつて世界に輸出されている。高谷君が南洋へ渡航したのも、この製麻事業に関係した用向きで、もつぱらこの方面の視察にふた月あまりを費して来たのであつた。

フィリピン群島にはたくさんの小さい島があるので、高谷君も一々にその名を記憶していないが、なんでもソルゴという島に近い土地であるといった。高谷君が元もと船ふねからボートをおろして、その島の口へ漕ぎつけたのはもう九月の末の午後であったが、秋をしらない南洋の真昼の日は、眼がくらむように暑かった。藍あゐのような海の水も島へ近づくにしたがって、まるでコーヒーのような色に濁っているのは、島のなかに大きな河があつて、その下流が海にむかつて赤黒い泥水を絶え間なしに噴き出しているからであつた。高谷君はひとりで大胆にその河口へ乗り込んで、青い草の繁つた堤どてから上陸しようとしたが、河の勢いがなかなか烈しいので、ややもすれば海の方へ押戻されて、彼もほとほと困つてい

ると、堤のうえに一人の男があらわれた。男は白いシャツを着て、
茸きのこのような形をした大きい麦わら帽子をかぶっていた。

「さあ、投げますよ。」と、男は明快な日本語で叫んだ。そうして、こっちの舟を目がけて長い麻縄を投げてくれた。無論、一度ではうまく届かなかつたが、二度も三度も根よく投げるうちに、縄のはしは首尾よく舟のなかへ落ちた。高谷君はさらにそれを船ふね端なばたへくくり付けて、一種の曳き舟のようにして堤のきわまで曳きよせてもらった。

「気をつけてください。流されますから。」と、男はまた注意した。

高谷君はその縄の端を立木の根へしっかりと縛りつけて、初め

て堤の上に登った。

「よくお出でになりましたね。」と、男は笑いながら挨拶した。かれは三十ぐらいの、体格の逞ましい、元氣のよさそうな男であった。

高谷君は自分の身分と目的とを説明すると、男は愉快らしくまた笑った。

「さようですか。まあ、こちらへいらつしやい。この島にはそうたくさんありませんが、それでも相当に麻畑があります。わたしがすぐに御案内します。わたしは丸山俊吉という者です。」

かれは日本の人で、三年ほど前からこつちへ来て、日本人と原住民とを合せて七十人ばかりの労働者の監督をしていると言った。

高谷君は彼のあとについて堤から十町ほども行くと、広い麻畑が眼の前にひろがって、芭蕉ばしやうに似た大きい葉が西南の風になびいていた。丸山はその一年の産額や品質などをいちいち詳しく説明してくれた。

「まあ、我れわれの小屋へいらっしやい。お茶でもいれますから」。

それからまた二町ほども行くと、そこに大きい家があった。屋根はトタンでふいて、三方は日本風の板羽目になっていたが、そのひどく破損しているのが高谷君の眼についた。案内されて内へはいると、中は一面の土間になっていて、部屋の隅には寝台と毛布がみえた。棚の上には酒の壇びんや缶詰のたぐいも乗せてあった。

ふたりはまん中に据えてある丸いテーブルを囲んで、粗末な椅子に腰をおろした。

「おい、勇造、お客様だ。早く来い。」

丸山に呼ばれて、ひとりの青年が外からはいつて来た。年のころは十八、九で、これもこういう南洋生活をしているにふさわしい、見るから頑丈らしい男であった。かれは茶つぽい縮ちぢみのシャツを着て、麻のズボンをはいていた。

あまくさ

天草の生れで、弥坂勇造という男であると、丸山はこれを高谷君に紹介した。勇造は丸山のボーイ代りに働いているらしく、かいがいしく立廻つて、チョコレートやビスケットなどを運んで来た。マニラ煙草も持つて来た。

「なにしろ、よくお出でくださった。」と、丸山はいかにも打解けたように言った。「内地の人も随分こつちへ来るようですけれども、大抵はおもな島々をひと廻りするだけで、こんなところまでは滅多めったに廻つて来る人はありません。毎日おなじ人の顔ばかり見ているんですから、まったく内地の人はお懐かしいんですよ。」

実際、かれらは高谷君を歓迎しているらしく、大切にしまつてあつたらしい葡萄酒の口をぬいて高谷君にすすめた。缶詰の肉や魚なども皿に盛つて出した。ここの島の島に住んでいる人としては、出来るかぎりの歓待を尽くされて、高谷君も気の毒になつて来た。はじめの予定ではほんの一時間ぐらい見廻つてすぐに帰るつもりであつたが、あまりに人なつかしく持成もてなされるので、高谷君も早

くは起たてなくなつて、いろいろの話に二時間あまりを費してしまつた。そのうちに丸山はこんなことを言い出した。

「この頃はここらに可怪おかしなことが始まりましてね。労働者がみんな逃げ腰になつて困るんですよ。」

「おかしなこと……。どんなことが始まつたんです。」

「人間がなくなるんです。先月からもう五人ばかり行くえ不明になりました。」と、丸山は顔をしかめながら話した。

「どうしたんでしよう。」

「判りません。なんでも四、五年前にもそんなことが続いたので、今までここに在住していたオランダ人はみんな立退たちいてしまつて、しばらく無人島のようになつていた所へ、我れわれが三年まえか

ら移つて来て、今まで無事に事業をつづけていたんです。勿論、来た当座は十分に警戒していましたが、別に変つたこともないので、みんなも安心していました。原住民たちも一時は隣りの島へ立退いていたんですが、これもだんだんに戻つて来て、今ではこうして我れわれと一緒に働いています。ところが、先月の末、二十五日の晩でした。この小屋の近所に住んでいる原住民の女が突然に行くえ不明になつたんです。どこへ行つたのか判りません。結局は河^{かわべり}縁へ水を汲みに行つて、滑り落ちて海の方へ押流されて、鱧^{ふか}にでも食われたんだらうという事になつてしまいました。するとそれから三日ばかり経つて、またひとりの原住民が見えなくなつたんです。こうなると、騒ぎがいよいよ大きくなつて、こ

れはどうも唯事ではない。むかしの禍わざわいがまた繰返されるのではないかという恐怖に襲われて、気の弱い、迷信の強い原住民たちはそろそろ逃げ支度に取りかかるのを、わたくしが無理におさえ、まあ五、六日は無事に済んだのですが、今月にはいつて四日ほど経つと、またひとりの原住民が見えなくなる。つづいて二日目にまた一人、都合四人も消えてなくなったんですから、わたしも実に驚きました。まして原住民たちはもう生きている空もないようにふるえあがって、仕事もろくろく手につかないという始末で、わたしも弱り切っていますと、いい塩あんばい梅こに小半月ばかりは何事もないので、少し安心する間もなく、六日前にまた一人、今度は日本人が行くえ不明になったんです。」

「日本人が……。やっぱり夜のうちに見えなくなっただんですか。」
と、高谷君は眉まゆをよせながら訊きいた。

「そうです。いつでも夜なかから夜明けまでのうちに見えなくなるんです。今までは原住民に限られていたんですが、今度は日本人の方へもお鉢おちが廻まわって来たので、みんなはいよいよ騒さわぎ出して、どうしても此こ処こにはいられないというんです。しかし折角せつかくこれまで経営した仕事を今さら中途で放棄するのも残念ですから、私もいろいろに理解を加えて、まあ当分は踏みとどまっていることにしたんですが、怖おそくつてここには寝ねられないというので、急に隣りの小さい島へ小屋掛こやかけをして、日が暮くれるとみなそこへ行いって寝ねることにして、夜よがあけるとこっちへ出て来るんです。実に不

便で困るんですが、さし当りはそうするよりほかにないんです。

お察しください。」

丸山もよほど困っているらしく、その男らしい太い眉をくもらせて話した。高谷君も息をのみ込んでこの不思議な話を聞いていた。

「で、その行くえ不明になった人間というのは、その後になんの手がかりもないんですか。」

「ありません。」と、丸山はすぐに頭かぶりをふった。「無論に手分けをしていろいろに穿せんさく索したんですけれど、影も形もみえません。なにか猛獣でも襲つて来るのか、あるいは山奥から我れわれの知らない野蛮人でも忍んで来るのかとも思つたんですが、死骸も残

っていない。骨も残っていない。血のあとも残っていないというのですから、一体どうしたのかちつとも見当が付きません。丁度あなたがお出でになったのを幸いに、あなたの御意見をうかがいたいと思うんですが……。どうでしょう、世間にこんなことがあるでしょうか。」

「さあ。」と、高谷君も首をかしげた。「行くえ不明になった人間はひとりで寝ていたんですか。それとも誰かそのそばに寝ていたんですか。」

「いや、それがまた不思議なんです。ひとりで寝ていたのならば、まだしもの事ですけども、日本人は大抵七、八人ずつ一軒の小屋に枕をならべて寝ているんです。まして原住民は十人も二十人

も土間にアンペラを敷いて、一緒にかたまつて転寝ぐるねをしているんですから、かりに猛獣が来ても、野蛮人が来ても、ほかの者に覺さとられないようにそつと一人をさらつて行くということは、よほど困難の仕事で、誰か氣のつく者がある筈はずです。ねえ、そうじゃありませんか。しかし人間が理屈なしに消えてなくなる訳のものでありませんから、私はまずこれを猿の仕業しわざと鑑定しました。」

「ごもつともです。」

「あなたも御同感ですか。」

「私もそれよりほかに考えはありません。さつきからお話を聞いているうちに、私はドイルの小説を思い出しました。」

「はあ、それはどんなことです。」と、丸山はテーブルの上に肱ひじ

を押出した。

隅の方の椅子によりかかっている勇造も、眼をかがやかして聞き澄ましていた。

二

「無論に作り話でしょうが、ドイルの小説にはこういうことが書いてあるんです。大西洋のある島の耕作地でやはり人間が紛失する。骨も残らない、血のあともない。よく詮議せんぎしてみると、結局それは大きい黒猩しやうじやう々の仕業であつたというのです。」と、高谷君は説明した。「今度の事件も余ほどよく似ているようですか

ら、あるいはドイルの小説が事実となつて、我れわれの見たこと
もないような奇怪な猿のたぐいが、夜なかにこの小屋へおそつて
来て、そつと人間を攫さらつて行くんじやありませんかしら。」

「なるほど。」と、丸山もうなずいた。「そこらが好い御鑑定で
す。ただ少し腑に落ちないのは、もしそんな怪物が来て人間を引
つ担いで行くとしたら、なにか声でも立てそうなものだと思ふん
ですが……。すこしでも声を立てれば、そばに寝ている者のうち
で誰か眼をさます者もある筈ですが……。」

「ドイルの小説によると、その猿は恐ろしい力で、まず寝ている
人間の胸の骨をぐつと押すと、骨は碎けてひと息に死んでしまう。
それを易やすやす々と担いで行くんだということです。たといひと息に

死に切らないものでも、その恐ろしい力で胸を押されて、もう半死半生になった上に、かつて見たこともないような怪物が自分の上にのし掛かっているんですから、大抵のものは異常の恐怖にとらわれて、もう声を出す元気もないだろうと思われれます。」と、高谷君は重ねて説明した。

「そうでしょう。しかし……。」と、丸山はまだ疑うように勇造の方を見返った。「我れわれもそう思ったもんですから、毎晩代るがわるに小屋の周囲を見廻って、威嚇いかくにピストルを撃つたこともあります。猛獣は火を恐れるというので、所々に焚火をしたことともあります。それでもやっぱり無効でした。現に十二カ所も篝かがりび火を焚いた晩に、日本人は攫さらって行かれたんです。」

こうなると、高谷君の議論もよほど影の薄いものになって来た。麻畑へ忍んでくる怪物は、野蛮人でも猿でもないらしかった。その次の問題は蟒蛇^{うわばみ}である。うわばみが這^はい込んで来て、ひと息に呑んでしまうのではないかとも考えたが、蛇も火を恐れる筈である。殊に夜なかに這い出して来るかどうかも疑問であった。鰐^{わに}も陸^{おか}へあがることがある。あるいは鰐ではないかという説も出たが、ここらの原住民は鰐に就いては非常に神経過敏であるから、その匂いだけでもすぐにそれと覚ることが出来る。原住民は決して鰐ではないと主張している。では大蜥蜴^{とかげ}かという説も出たが、とかげが人を喰おうとは思われない。たとい喰ったとしても、骨も残さずに呑み込んでしまう筈はない。結局それは野蛮人の仕業

であろうということになったが、丸山はまだそれを信じないらしかった。

「もしここらの森や山の蔭に、我れわれの知らない野蛮人が棲んでいるとしても、原住民もかつてそんな人間らしいものを認めたことがないというんです。とにかく私も余り残念ですから、ほかの者だけを隣りの島へ泊りにやって、私とこの勇造のふたりだけは毎晩強情にこの小屋に残っているんですが、この二、三日はなんにも怪しい形跡も見えません。敵もこっちの油断を狙って来らしいんですから、一度いたずらをするとは分はやって来ないようです。そこで、こっちが少し安心すると、その油断を見て不意に襲って来る。いつもその手でやられるのですから、今夜あたり

はもう油断ができませんよ。」

高谷君も一種の好奇心にそそられて、自分も今夜はこの小屋に泊って、その怪物の正体を見届けたいと思った。その話をする、丸山も非常に喜んだ。

「どうかそうしてください。あなたも一緒にいて下されば、我れわれも大いに気丈夫です。あなたの御助力で、どうかこの怪物の正体を確かめたいものです。どうもお構い申すことは出来ませんが、あなたの寝道具ねどうぐぐらいはありますから。」

「どうで徹夜の考えですから、寝道具などはいりません。夜がふけると冷えるでしょうから、毛布が一枚あれば結構です。しかし私がいつまでも帰らないと、船の者が心配するでしょうから、誰

か私の手紙をとどけてくれる者はありますまいか。」

「ええ、ぞうき雑作もありません。」と、丸山は勇造に言付けて、ひとりの原住民を呼ばせた。

手帳の紙片をひき裂いて、高谷君は万年筆でその用向きを書いた。原住民はそれを受取つて、すぐに小舟に乗つて使いに行くといった。今夜ここに泊ると決定した以上、高谷君はその附近の地をよく見さだめて置く必要があるのもう一度そこらを案内してくれまいかというのと、丸山はこころよく承知して一緒に出た。空はまだ明るかつた。貝殻の裏を覗いたのぞような白い大空が、この小さい島の上を弓形ゆみなりに掩つて、その処々に黄や紅の斑ふを打つたような小さい雲のかたまりが漂つていた。高谷君は今更のよう

に、その美しい空の色どりを飽かずにながめた。麻畑のなかには大勢の日本人が原住民と入りまじって、麻の葉を忙がしそうに刈っているのが見えた。かれらは大きい帽子をかぶっているので、その顔はよく見えなかったが、おそらく夜の悪夢におそわれたような心持で、昼も仕事をつづけているのであろう。高谷君と丸山とのうしろには、かの勇造もついて来た。

「もう一つ判らないことがあるんですよ。」と、丸山は麻畑をぬけた時に言った。

三人の眼の前には大きい河が流れていた。その濁った水が海へそそぐであろうと、高谷君は想像した。低い堤に立って見おろすと、流れはずいぶん急で、堤の赭あかつち土を食いかきながら、白く濁

つた泡をふいて轟々ごうごうと落ちて行つた。

丸山はステツキでその水を指さした。

「ごらんください。この河が境になつて、河むこうはあの通りの藪やぶになつてゐるんです。怪物がもしあの藪から出て来るとすれば、どうしてもこの河を渡らなければならぬ訳ですが、ここを横切るといふことは容易じゃあるまいと思われえたいるんです。人間は無論ですが、猿にしても蛇にしても、あるいは得体の知れない猛獣にしても、この河を泳いでわたるのは大変でしょう。といつて、河のこつちはもうみんな開けてゐるので、なんにも棲んでゐる筈はありません。どう考えても怪物はその河むこうに棲んでゐるか、あるいは海の方から襲つて来るか、この二つよりほかにありませ

んが、もし海から襲つて来るとすれば、隣りの島へも来そうなものです。しかし原住民の話によると、隣りの島にはかつてそんな不思議はないということです。あなたのお考えで、この大きい河を渡つて来るような動物がありませんようか。」

「さあ、なにしろ急流ですからね。」と、高谷君は怖ろしい秘密を包んでいるような、濁つた水の流れを見つめていた。

三人はまた黙つて河上の方へ遡のぼつて行つた。空はまだ美しく輝いていたが、堤のあたりはもうそろそろ薄暗くなつて来た。水の音もだんだんに静かになつて来た。丸山は水を指さして、また説明した。

「ここから上流の方は水勢がよほど緩ゆるいんです。河底の勾こう配ばいに

も因りましようが、もう一つには天然の堰せきが出来ているからです。
」

ここらへ来ると、河底から大きい岩が突出していた。何百年來河上から流れてくる大木の幹や枝がその岩にせかれて重なり合つて、自然の堤を築いているので、そこには大きい湖みずうみ水のようなものを作つて、岸の方には名も知れない灌かんぼく木や芦あしのたぐいが生い茂つていた。

「この通り、ここらは流れが緩いもんですから、みんなここへ来て水を汲んだり、洗濯物をしたりするのです。遠い昔から自然にこうなっているんでしょうが、まことに都合よく出来ていますよ。」と、丸山は笑つた。「第一、下流の方は水が濁つていて、と

ても飲料にはなりませんからね。」

勇造は如才なくバケツを用意して来ていた。かれは灌木をくぐり水ぎわへ降りて、比較的比較的に清い水を一杯くんで来た。水の上はいよいよ薄暗くなつて、一種の霧のような冷たい空気が芦の茂みから湧き出して来た。

「今夜も降るかも知れませんね。」と、勇造はバケツをさげながら空を仰いだ。三人の頭の上には、紫がかつた薄黒い雲の影がいつの間にか浮かんでいた。

「むむ、今夜も驟シャワー雨かな。」と、丸山も空を見た。「しかし大したことはありませんよ。大抵一時間か二時間で晴れますよ。」と、かれは高谷君に言った。

それにしても驟雨が近づいたと聞いては、ここらにうろうろして居るわけにもいかないのです、高谷君はもう小屋へ帰ろうと言つた。

三人はもと来た堤をつたつて麻畑へ出て、小屋の前へもどつてくると、大勢の労働者は仕事をしまつて、そこに整列していた。

「今夜も隣りへ行くのか。」と、丸山は笑いながら言つた。

大勢は挨拶して河下の方へ降りて行つた。さつきも話した通り、かれらは小舟でとなりの島へ泊りに行くのであると、丸山は高谷君にまた説明した。そうして、勇造に命じて夕飯の支度にかからせた。

日が暮れると果たして激しい驟雨がおそつて来た。その雨のひ

びきを聞きながら高谷君は夕飯を食った。

三

ここらの驟雨は内地人が想像するようなものではなかった。まるで大きい瀑布たきをならべたように一面にどうと落ちて来て、この小屋も押流されるかと危ぶまれた。雨の音がはげしいので、とても談話などは出来なかった。高谷君と丸山とはうす暗い部屋すきまのなかに向い合つて、だまつて煙草をすつていた。テーブルの上には蠟燭ろうそくの火がぼんやりと照らしていたが、それも隙間から吹き込んでくる飛沫しぶきに打たれて、幾たびか消えるので、丸山もしま

いには面倒になつたらしく、消えたままに捨てて置いたので、小屋のなかは真の闇になつてしまった。ただ時どきに二人がするマツチの光りで、主人と客とが顔を見合わせるだけであつた。

となりの部屋では勇造が夕飯のあと片付けをしているらしく、いたばめ板羽目の隙間から蠟燭の火がちらちら揺らめいていたが、それもしまいには消えてしまつたらしい。雨は小やみなしに降つていた。「随分ひどい。今夜はいつもより余ほど長いようだ。」と、暗いなかで丸山は言った。

高谷君はマツチをすつて懐中時計を照らしてみると、今夜はもう九時を過ぎていた。この暗い風雨の夜、しかも恐ろしい怪物があらわれるとかいうこの小屋に、丸山と勇造と自分とたった三人

が居残っただけで、小屋の内は愚か、この島じゆうに誰も人間らしいものは一人もいないのかと思うと、高谷君はいささか心寂しくなつて来た。そのおびえた魂をいよいよむ脅かすように雷が激しく鳴り出した。

「雷が鳴れば、もうやがて止みます。」と、丸山は言った。

「この雨では怪物も出られますまい。」

「そうです。ことに雷がこう激しく鳴つては、大抵の怪物も恐れて出ないかも知れません。」

雷はますます轟とどろいて、真つ蒼な稲妻の光りが小屋のなかまで閃ひらめいて来た。その光りに照らされた丸山の顔はさながら怪物のようにも見られて、高谷君は薄気味悪くなった。ふたりはまた黙つて

しまった。隣りの部屋も鎮まっていた。雨はそれから二時間ほど降りつづいて、しまいには小屋のなかまで流れ込んで来たらしい。高谷君の靴の先は濡れて冷たくなって来た。雷は地ひびきがするほどに鳴った。

「あ。」と、丸山は突然に叫んだ。そうして、大きい声でつづけて呼んだ。「おい、勇造、勇造……弥坂……弥坂……。どこへ行く。」

雷雨が激しいので、高谷君にはとても判らなかつたが、風雨に馴なれている丸山は勇造がどこかへ出て行く足音を聞きつけたと見える。かれは頻しきりに勇造の名を呼んだが、隣りではなんの返事もなかつた。

「この降るのに、どこかへ出たんですか。」と、高谷君は不安らしく訊いた。

「どうもそうらしい。」と、丸山は神経が亢奮こうふんしたように言った。

かれは突然に立ち上がってマッチの火をすりはじめた。高谷君も手伝って、ようようのことで蠟燭に火をともした。

土間はもう三寸以上も雨水に浸されていた。ふたりはその水を渡りながら、蠟燭の火を消さないように保護してあるき出した。

となりの部屋とのあいだには四尺ばかりの入口があつて、簾代りすだれのアンペラが一枚垂れていた。そのアンペラをかかげて隣りの部屋を覗いてみると、果たしてそこには勇造の姿がみえなかつた。

「あ、やられたかな。」と、丸山は跳り上がった。その途端に蠟燭の火は消えてしまった。

言い知れない恐怖に襲われながら、高谷君はあわててマッチをすった。もう蠟燭をとすのももどかしいので、二人はあらん限りのマッチをすって、そこらじゅうを照らしてみたが、勇造の姿はどうしても見付からなかった。

「まだ遠くは行かない筈だ。」

丸山は衣兜かぶしからピストルを取出して表へ駈け出した。高谷君も用意のピストルをとって、つづいて駈け出した。しかしどっちへ行くという方角も立たないので、ふたりは雷雨のなかをうろうろしている、蒼い稲妻がまた光って、その光りに照らされた麻畑

のあいだに勇造のうしろ姿が見えた。ふたりは瀑布たきのような雨を衝いて麻畑のなかへまっしぐらに追って行った。稲妻が消えると、あとはもとの暗やみになってしまったので、二人は再び方角に迷ったが、勇造は堤の方へ行ったらしく思われたので、ふたりは頻りにその名を呼びつづけながら、麻畑を駈けぬけて河の岸へ出ると、雷はまた鳴った。稲妻もつづいて走った。その光りの下に勇造の姿がまたあらわれた。かれは堤から河の方へ降りて行くのである。

「弥坂君……勇造君……。」

「勇造……弥坂……。」

喉のどが裂けるほどに呼びながら、ふたりは堤から駈け降りようと

すると、ぬれた草に滑つて丸山がまず転んだ。高谷君も転んだ。ふたりとも大きい蔓草つるくさに縋すがつたので、幸いに河のなかへ滑り落ちるのを免かれたが、そのあいだに勇造の姿は見えなくなつてしまつた。それでもふたりは強情に彼の名を呼んで、びしょ濡れになつてそこらを駆け廻つたが、どうしても彼のすがたは見付からなかつた。

雷雨はそれから三十分ほどの後に晴れて、明るい月が水を照らした。ふたりは堤から麻畑くまを隈なく探してあるいたが、その結果は、いたずらに疲労を増すばかりであつた。ふたりはもう我慢にも歩かれなくなつて、這はうようようにして小屋に歸つて、そのまま寝床の上に倒れてしまつた。

夜があけてから労働者が戻つて来た。かれらはゆうべの話をきいて蒼くなつた。大勢が手分けをして捜索に出たが、勇造の行くえはどうしても判らなかつた。いつまでもここに残っているわけにもいかないの、高谷君はその日の午後麻畑の小屋を出た。別れるときに丸山は言つた。

「もういけません。労働者たちはどうしても此処ここにいるのはいやだと言いますから、わたしも残念ながらこの島を立去つて隣の島へ引移ります。弥坂は実に可哀そうなことをしました。しかしゆうべの出来事から、私はこういうことを初めて発見しました。怪物は猿でもない、蟒蛇うわばみでもない、野蛮人でもない。たしかに人間の眼には見えないものです。ピストルでも罨わなでも捕とることの

出来ないものです。眼に見えないその怪物に誘い出されて、みんなあの河へ吸い込まれてしまうのです。」

「私もそんなことだろうと思います。ほかの者がそう言うなら、あなたももう諦めてここをお立退きなすった方が安全でしょう。」と、高谷君も彼に注意した。

「ありがとうございます。そんなら御機嫌よろしゅう。」

「あなたも御機嫌よろしゅう。」

大勢は河の入口まで送って来た。高谷君はもとのボートに乗って元船へ帰った。

この話のあとへ、高谷君は付け加えてこう言った。

「船へ帰ってからその話をすると、船員も他の乗客も、みんな不思議がつているばかりで、何がなんだか判らない。船に乗組んでいる医師の意見では、この怪物はむろん動物でもない、人間でもない、一種の病気——まあ、熱病のたぐい——だろうというんだ。さつきも話した通り、河上には流れのゆるい、湖水みずうみのようなところがある。そこには灌木や芦のたぐいが繁っている。島にいるものは始終そこへ水をくみに行く。そこに一種のマラリヤ熱のようなものが潜んでいて、蚊から伝染するか、あるいは自然に感染するか、どの道その熱病にかかると、人間の頭がおかしくなつて急に気違いのようになる。そうして自分から河へ身を投げるに相違ない、とこう言うんだ。なるほど、そんなことがあるかも知れ

ない。それでまずひと通りの理屈はわかったが、ただ判らないのは、どの人もみんな河へ飛び込むというところで、もし頭が変になって自殺するならば、水へはまるには限るまい、なかには麻刈り鎌で自殺する者もありそうなものだが、みんな申し合せたようにその河に吞まれてしまう。それが僕にはまだ判らない。なんだかあのコーヒー色の水の底に、人間の知らない魔物でもひそんでいるんじゃないかとも疑われる。

医師はまたそのうたがいに対してこういう解釈を加えている。その患者は非常に熱が高くなって、殆んどからだが焼けそうに熱くなるので、苦しまぎれに水に飛び込むのだらうと……。これも一つの理屈だが、理屈はまあどうにでも付くもので、なにしろ僕

は南洋の麻畑に一夜をあかして、こんな怖ろしい目に逢ったということを話せばいいのだ。ドイルの小説の狸々ならば、またそれを退治する工夫もあるだろうが、眼にみえないものではどうにも仕方がない。果たしてそれが一種の病気であるとしても、僕はやはり怖ろしい。君も勇気があるなら一度あの島へ探検に出かけちゃあどうだね。」

青空文庫情報

底本：「鷺」光文社文庫、光文社

1990（平成2）年8月20日初版1刷発行

初出：「慈悲心鳥」国文堂書店

1920（大正9）年9月

入力：門田裕志、小林繁雄

校正：松永正敏

2006年10月31日作成

2007年9月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

麻畑の一夜

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>